

VI. ガーナ帰国後の報告

● 現地研修の研修報告書での報告

※現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。

1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

● 青山英孝

研修前の子ども達や同僚のガーナ観を要約すると、自身も含めて「具体的なイメージや位置関係が不明瞭」「危険や未開の地、不衛生を連想する国」という先入観や偏見を持った見方や考え方が多かった。約2週間の滞在を通して、自己認識の甘さや固定観念の怖さを実感したからこそ、子ども達には書籍や旅番組から得るガーナ観ではなく、ありのままのガーナの姿を伝えたいと思う。また、研修地では、たくさんの人々と出会うことができた。これが一番嬉しいことであり、且つ何事にも換え難い大切な財産になった。エネルギッシュな姿を連発する発展途上国に加えて、ガーナで暮らす人々が多様だからこそ、ガーナという国に対する思いや感覚が多様になると実感した。そんな内容や場面を、多種多様な人から直接話を聞いたことは嬉しかった。これから実践する授業では、実際に見聞した貴重な題材を整頓し、ガーナの魅力や抱えている課題に迫れるような教材を開発したい。そして、現地の状況が切実に伝わる資料を使い、子ども達の一面的なガーナ観をほぐすことから始め、ガーナに関する社会的事象について仲間と共有したり、話し合ったりする活動を通して、現代ガーナに対する多様な見方や感じ方に触れる機会を学習者に提供していこうと思う。

● 板倉めぐみ

私は小学校で養護教諭として勤務をしている。開発途上国の保健分野の現状を把握し、養護教諭の立場でできることを考えたいと思い研修に参加をした。ガーナでは、水不足や医療を十分に受けることができない、予防方法を知らないなど、保健に関する問題がたくさんあり、「保健分野」が大きい課題となっていた。そして、それらの課題を解決しようと現職教員特別派遣中の日本人養護教諭が現地で行っていた。また、日本でも「学校保健」研修が毎年実施されて、世界中の研修員が学校保健活動を学びに来ていることも教えてもらった。現地での研修を終え、養護教諭として日本でできることや伝えていくべきことがきつとあると思った。日本の子どもたちには、途上国の健康問題について伝え、健康でいることの大切さに気づくとともに、健康でいるための方法について考えていくことができたかと考えている。そして、今まで養護教諭が世界の健康課題に目を向けた実践がされていなかったため、少

しでも多くの養護教諭や学校保健に携わる人々に伝えていきたいと思った。

● 伊藤樹李

私の本研修の目的は、①子どもたちが抱えている途上国の否定的なイメージを変えること、②自分が抱えている漠然とした国際協力・支援の在り方の答えを見つけることだった。①に関しては、現地で自然や町並み、人々の生活の様子を撮影したり、楽器や民芸品を購入したり多くの教材を収集することができた。②に関しては、“支援の形は1つの答えに絞られない”という大きな気付きがあった。これは、現地の小学校や農家、野口記念医学研究所などの訪問地で各々のスキルを生かし、活躍する多くの日本人との出会いのおかげである。研修終盤で JICA の木村さんが支援のポイントは、①途上国の現状把握、②段階的、③継続的の3点であるとお話して下さったが、この話は自分でも驚くほど心に落ちた。本研修の達成度及び満足度は非常に高い。教師という自身の立場を生かし、子どもたちにガーナを起点に世界の現状を広く伝えていくことが、私にまずできる間接的な支援の形であると感じた。

● 加藤未来

私は、4年間ずっと同じ学年を担当し、発展途上国のことを教えてきた。集大成を見せるべく、そして何か子どもの人生に影響するようなことをしていきたいと考えて、研修に参加した。研修をする中で、海外で活躍する日本人にたくさん出会うことができた。活動をしているときや現地の方と触れ合っている姿を見ると、とても輝いてみえた。さらに、話をする機会がたくさんあり、その中で目標や願いをもち、やりがいを感じていることに直接ふれることができた。そこで、自分が心を動かされた。諦めかけていた夢の海外ボランティアの参加をもう一度考え直し、参加してみたいと思ったのである。自分がこんなに心を動かされたのなら、子ども達も心を動かされるのではないかと思う。いや、心を動かしたいとみせようと思う。自分が心を動かされたことから、子どもの人生の幅を広げる題材を手に入れることができたと確信している。

● 高井季代子

目的の一つ目は、現地で活躍する人たちの生き方を取材することであった。様々な仕事や人の生き方を知ることが、

生徒自身の生き方を思い描くヒントになると思ったからだ。ガーナでは、青年海外協力隊の方々に、やりがいや苦労、子どもたちへのメッセージなど直接伺うことができた。また、JICAの職員の方々やその他の日本人の方、ガーナの研究者や農夫などにも話を伺うことができたこともよかった。多くはビデオに収めることができたので、生の声を持ち帰ることができた。二つ目は、未知の世界「ガーナ」のありのままを体感してくることであった。移動中、バスの車窓から見える風景や人々の生活の様子、イメージと同じだったり違ったり、想像すらできなかった事にたくさん出会うことができた。ホテルやレストランでも、現地の人に声を掛けて話げできたことも収穫だった。連絡先を交換できた人もおり、帰国後に質問をメールですることもあった。今後も、連絡を取り合いたいと思う。

● 高井菜穂子

私の研修での目的は、ありのままのガーナを体験し、その中からガーナの良さを見つけることだった。今回の研修で、教育、産業、医療、歴史、観光、文化など、様々な側面からガーナを知ることができた。その中でも、ガーナの人々が自国に誇りをもって生活しているということを感じ、感銘を受けた。ガーナの平和を誇りに思い、文化を愛する心は、私たちも見習うべきところがあるのではないだろうか。実践では、ガーナの文化を紹介するとともに、日本の文化をもっと知りたいと思う気持ちや、自分のアイデンティティーに誇りをもつ気持ちを育めるようなことをぜひ取り入れたいと思った。また、JICAの支援事業を通して、支援のあり方について考えることができたことも、研修の収穫の一つである。支援はまず自分の隣にいる人から始まる、ということを改めて感じる事ができた。今回の研修では、当初の目的よりもたくさんの方が学べ、とても有意義なものになった。

● 野口哲平

現地研修に対する目的は、発展途上国の現状を知りたいという事で参加した。現地の人々の声を聞き、その土地ならではの臭いや風景を感じ、考え方や課題を知る事ができたのでとても良い現地研修だった。一番の目的である発展途上国の現状ですが、農村・商社・研究所・役所・ボランティア・JICAといった幅広い団体の方から聞き取ることができたので、書面ではなく、実際経験から授業を作ることができようになるので、80%満足できる内容を知ることができた。不足分は、私の語学力がまだ乏しく、たくさん聞き取りができなかったことが10%、準備がまだまだ足りなかったのが10%だった。授業実践の時に生かしたいと思うことは、各団体で考え方や課題が違うこと、教科書やインターネットにあふれるステレオタイプとガーナは違うということを丁寧に伝えていきたいと思う。そのために、アクティブラーニングの形で、生徒がガーナについてのイメージを話し合ってもらい、その後で、実際はこういう風なのだよということ伝えて理解を深めていこうと思う。

● 藤井健太郎

中学校の社会科では、地理的分野「世界の諸地域」の学習においてガーナという国が取り上げられる。チョコレートの原料となるカカオの生産や、金の採掘が行われる資源豊かな国として紹介される。そして、農業や鉱業が産業の中心であるアフリカ州の様子を理解していく。本研修を通して、日本人にも馴染み深いカカオの生産・流通過程について知るとともに、特定の輸出品目に偏った産業形態が社会生活に与える影響等について知ることができればと考えていた。この点については、カカオ農園を視察することや伊藤忠商事のガーナ事務所長の話から理解を深めることができた。また公的分野においては、日本の政府開発援助（ODA）についても学ぶ。野口記念医学研究所への視察では、顕微鏡等の研究機材が日本からの支援によって整備されていること。さらに、研究者の留学支援や東京医科歯科大学との交流事業が積極的に進められている現状を知ることができた。野口記念医学研究所は、日本の国際貢献の具体的な事例として生徒に伝えたい教材である。

● 山口貴史

私が現地での研修における目的は、担任する障害のある児童が自分自身や自分を取り巻く環境において、多様な見方をもつことができるようになるために、①私自身が現地の人々や文化、暮らしを受容して1つの教材となること、②現地の人々が用いる実物を収集することの2つであった。①については、私自身の現地での経験や体験で達成することができた。ガーナという国に行くことで、ガーナの人々の温かさ、人間性、文化、暮らしに直接向き合い、多様な見方をもつ視点をもらった。それと同時に、人々はつながっており、互いに協力し合って生きていることも感じることができた。そのため、自分自身が教材となり、日本の児童だけではなく、教員や保護者、地域の人々など、できる限り多くの人に伝えることを実践していきたい。また、②については、現地の民族衣装や楽器、保存用として食材が加工された粉、油などを収集することで達成した。これらは、現地に行かないと手に入れないものが多い。授業で、実際に着る、触れる、食すことを通して、少しでもガーナを身近に感じ、自分たちの取り巻く生活との違いに気づく視点をもてるようにしていきたい。

● 山田真沙美

私は、今回の研修に2つの目的をもって参加した。自分が開発途上国の現状を知り、生活や文化、価値観の違いに触れて自分の視野を広げること。二つ目は、英語が苦手な自分でも、主体的に関わる気持ちを大切に現地の人々と交流するという事であった。特に、ガーナの学校交流の時間では言葉がうまく通じず、なんて説明すればいいのか戸惑う場面に多く遭遇した。しかし、片言の単語と、ジェスチャーと気持ちを全身で表現していくことで、現地の子供達と気持ちが通じ合えたことが今回の現地研修の中で印象深く残った。なぜ、気持ちが通じ合えたのか。それは、お互いが互いの考えを受け止め、知ろうと歩み寄

り、相手を大切に思って接し合えたからこそではないかと私は考えた。この経験を日本の子供達にも伝えたいと共に実感させたい。そこで授業実践では「知ろう」をキーワードに他者の多様性を受け止めるワークを取り入れて他者を知り、お互いが関わり合う楽しさを感じられる実践を行いたいと思う。そして、自分から主体的に他者に関わろうとする姿勢を育てていきたいと思う。

2. 柱1「訪問国に肯定的に出会う」観点から学んだこと



● 青山英孝

どの国を旅しても同じだと思うが、日本の生活スタイルや習慣など、自分を取り巻く感覚と比較すると決して肯定的な見方は生まれにくい。やはり現地の人に直に触れ、生活の息吹を直接肌で感じてこそ、そこで暮らす人々についての興味や関心が高まると思う。ガーナの人々の笑顔や親切心、誠実な言動に多く触れて、自分寄りの物差しでその国を覗こうとする感覚の無意味さを再認識した。また、経済的な指標だけでガーナの豊かさや、心の満足度を計ることはできないことを実感した。確かに日本と比較すれば貧困な生活に見えるが、路地で炉を囲んで朗らかに食事の支度をする家族の温かい絆、素足だが友達と元気で元気の茂る運動場を駆け回る子どもの笑顔、活気溢れた市場や道路に沿った店で中古品を買い求める買い物客のエネルギッシュな光景は印象的だった。そんな豊かで温かな人間関係の中で暮らす人々を垣間見ていると、日本が発展の代償として失いつつある、人の顔が見え、つながりを実感するという人間の営みで大切にしたい価値を語りかけてくれた。

● 板倉めぐみ

ある日のお昼ごはん。私たちはレストランで注文をした後に、すぐ近くの海辺へ散歩をしに行った。いつも料理が出てくるまでとても時間がかかる。何人かが注文したハンバーガーがやっと出てきたと思ったら、途中からハンバーガーではなく食パンに変わっていた。食パンの間にハンバーガーが挟まっている。ハンバーガーではなく、ハン食パン。これはもうサンドイッチだと思った。もし、こんなことが日本で起きたら私はとても怒ると思う。もしかしたら、長い待ち時間に耐えることさえできず、お店を出してしまうかも

しれない。でも、ガーナでは全く気にならなかった。一人は、みんなが食べ終わった後にやっと料理が届いた。そのときも怒ることなく「あ～！きてよかったね」とみんなで言った。私はこのとき、ガーナは私たちをとっても豊かな気持ちにしてくれていると感じ、気持ちの変化に驚いた。アンハッピーをハッピーにかえてくれるガーナはとても素敵なお店だった。

● 伊藤樹李

多くの日本人のガーナのイメージは“チョコレート”、多くのガーナ人の日本のイメージは“TOYOTA”。国名こそ知っているものの、お互いの生活や考え方についてはあまり知らない。私自身、訪問前は具体的なイメージがもてていなかった。そのため、毎日車窓から見る「頭にものを乗せて運ぶ人々」や「信号待ちの度に窓を叩くベンダー」「ネットのないサッカーゴールを目指し、ボール代わりのヤシの実を追いかける子どもたち」などガーナの日常は非常に興味深かった。また、研修中、ガーナ人に「ニーハオ？」と言われることが多かった。「NO.JAPANESE.こんにちは。」と返すと、決まって「Oh JAPAN!」とにっこり笑顔。握手を求められることもあり、ガーナ人が日本を肯定的に捉えているということを実感した。日々の人間関係でも同じだが、相手が肯定的だと、こちらも嬉しく自然により肯定的になれる。私がガーナと肯定的に出会うことができたのは、ガーナ人のおかげかもしれない。

● 加藤未来

ガーナの方々、国を愛している。ガーナのことをよく知り、多くのことを伝えてくれるし、ガーナの発展を願い、考えている。日本はすごいことがたくさんあるにもかかわらず、伝統や良さを知らない。もっとガーナのように、日本を知り、愛していきたい。ガーナの方々、人がいい。バスに乗っている間も、手を振ってくれるのである。そして、運転手のアムムさんは丁寧に何度も現地語を教えてくれた。また、落とした財布がお金はそのまま、戻ってきた。犯罪がたくさん起きたり、身近に起きたりする訳ではなく、その経験の範囲では日本と治安は変わらないと思えるのである。海外がこわいから行かないというのはもったいない。実際に行ったら、海外に対して肯定的に出会う。そして、人生観や価値観が変わるくらいのことが起こり得る可能性があるのだ。

● 高井季代子

途上国を含めた幾つかの国を訪れたことがあるが、ガーナほど「人」に好感が持てた国はない。現地の青年海外協力隊員の方から、ガーナには「困っていたら助け、持っていたら分け合う文化」があると伺った。例えば、誰かの葬式があると、その人のことを知らなくとも、お金が手元であればそれをもって葬式に参列する。女性が大きな荷物を持っていると、見ず知らずの人でもその荷物を持ってくれる、などである。また、日本では知らない人に挨拶することにためらいを感じるが、ガーナでは自然にそれができ

てしまう。長年、自分の心の中に構築されてきたアフリカに対しての壁が崩れていった。さらに、女性が小さな子どもを抱えながら農作業をしたり物を売っていたりホテルの仕事をしたりしている姿をよく見た。学校、省庁、医学の分野でも女性が進出しているという。実際、学長、校長、研究員など多くの活躍する女性を見掛けた。ガーナは、女性が活躍する社会であった。

● 高井菜穂子

すれ違う人は皆挨拶してくれる、人々が時間にゆとりもって生活している、助け合いの精神がある、家族を大事にしているなど、ガーナの良いところをたくさん見つけることができた。特に素晴らしいなと思ったところは、自国に誇りをもっているところである。ガーナの人に「ガーナのどんなところが好きか」と尋ねると、皆口を揃えて「Peaceful などところ！」と答える。これは、ガーナが多く部族が暮らす、いわゆる多民族国家でありながら、部族間の争いがほぼ無いことや、西アフリカで最初に民主主義国家として独立を果たしたことを、国民が誇りに思っているからだということが、JICA スタッフの方の話からわかった。また、街や村で見掛ける多くの人が、老若男女問わず、アフリカ独特のカラフルな色彩の民族柄の服を着ており、独自の文化も大切にされているのだと感じた。そして、女性が皆おしゃれでした。編み込みのヘアスタイルは、私もいつかやってみたい!と思う。

● 野口哲平

肯定的に出会うと言っても、国内で調べているだけでは不安があるために100%肯定的にはなれないということが分かった。ガーナでいえば、治安や飲料水の不安、語学における意思疎通ができない部分など、知らないことから起こる不安から肯定的になれないと思った。しかし、ガーナについて調べ、JICAの体験報告や自分のバックパッカーの体験を統合していくうちに、興味や疑問点がわいてきて、肯定的な気持ちになっていった。肯定的に出会うためには、「日本国外に行った経験×事前に訪問国について調べる」…ということが、重要になってくることが分かった。また、一緒に行く仲間との連携がとれると、いっそう垣根を低くして取り組むことが分かった。

● 藤井健太郎

ガーナの地に降り立った第一印象は、「思ったより発達している」ということだった。道路には多くの車が走り、高い建築物も見られる。人々は、スマートフォンを手に様々な通信機能を活用する。自分の中に、「アフリカ=未発達地」という先入観があったのかもしれない。この通信機器の普及を支えているのは、電力である。ガーナの電化率は、70~80%と言われる。多くの地方都市を訪問したが、バスの車窓から見える風景の中には送電線がどこまでも続いていた。家々の屋根にはTVアンテナが立てられ、テレビもかなりの割合で普及しているように思われる。さ

らに、教育分野にも情報化の進展が見られ、学校ではICT教育という授業も導入されていた。交通、建築、通信など個々に見たとき、質的な面での日本との違いはあるだろうが、生活様式としては自分自身と大きく変わらないのかもしれない。また、出会うと言えば人との出会いもあった。ガーナの小中学校に行くと、大勢の子どもたちが迎えてくれた。覚えてたの日本語で歌を歌う姿は微笑ましく、温かい気持ちになった。

● 山口貴史

今回の研修で大切だと思ったことは、自分の先入観に頼りすぎず、現地のことを身近に感じ、「もっと知りたい」という気持ちを持つことである。事前に調べていたことがあったが、現地に行く前のイメージと、現地に行って、見て、聞いて、感じたこととの差が個人的には大きかったように思う。しかし、研修が進むについて、事前に調べていたことと、現地での実際に経験したことを合わせていく中で、ガーナに対する自分なりのイメージを持つことができた。ガーナの子や自転車事情、住居、食生活、農業経営など、様々な場面でその人たちが抱える問題や課題に直面しながらも、みんなで協力し合って生きていると感じた。「人々はどこでどんな生活をしていても笑顔で生きている」ということを感じさせる経験は私自身のとても大きな感動であった。情報化社会が進む現代において、情報は無数にあり、いくらでも手に入る。しかし、その情報を、現地に行ってガーナの根本や背景、人間性などと合わせながら、しっかりと捉えて考えていくことで、ガーナをより身近に感じ、肯定的で多面的な視点で見ることができるようになっていくと感じた。

● 山田真沙美

私がガーナに来て一番に思ったことは、人々の関わり合いがとても多いということである。ガーナの人々はとても優しく、親切で親しみやすい人々だった。あいさつはもちろんだが、相手のことを知ろう、大切にしよう、喜んでもらおうという気持ちが感じられた。What is it saying in your country? と尋ねてくれたり、自分たちの生活を紹介してくれたりとても積極的。また、子どもも大人の姿を見て手伝おうと自分から動く姿が多く見られる。そして、ガーナの人々は家族をととても大切にしている。家族構成も大家族で昔の日本のようだった。生活の面で不憫さがもちろんあるが、その不憫さをみんなで協力し合って乗り越えている。だからこそ、人々の中で困っている人がいれば助けあう気持ちが育ち、人々のコミュニティが発達していくのではないかと思った。さらに、働き手の中には女性も多く、子どもを背負いながら働く姿に、女性のパワーと社会の理解を感じた。

3. 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」観点から学んだこと



● 青山英孝

ガーナでは熱帯気候のためパイナップルが収穫できる。かつて青年海外協力隊として、貧困を救おうと、ひょうたん型をしたファンティパイナップルを、痩せた大地一面に育てようと情熱を注いだ武辺寛則さんの活躍を知った。芯まで甘く、柔らかな食感に、ひとくち食べて虜になった。そして、今なお彼の生き様や遺志を受け継ぎ奮闘する村人や、村の発展のために鼓舞する青年海外協力隊員に感銘を受けた。また、今から80年以上も前に、遠く離れたアフリカの地で人類のために命がけで黄熱病の研究に献身した日本人に誇りを感じた。アクラ大学内にある研究所では、ガーナの若手研究者や日本の医師がその精神や遺志を受け継ぎ、新たな感染症を撲滅するために最先端の治療法の確立に向けて尽力する姿に、時と国を越えた連綿としたつながりを感じた。このほかにも、日本の自動車産業の主要メーカーの車種が往来したり、高い技術力を持つ電気機器メーカーの電子製品がガーナの生活向上に貢献したりしている光景から、人のつながりだけでなく、技術や工業製品等の新たなつながりが生まれ、その恩恵を受けて、日本との間に強固な友好関係が構築されていると実感した。

● 板倉めぐみ

ガーナで日本人が活躍していること、日本の機材を使い研究がされていること、チョコレートになるカカオが育てられていることなど、日本とのつながりを感じることはたくさんあった。つながりを感じるたびに、とても遠いガーナがちょっとずつ近くに感じるようになった。私は、帰国後にガーナ→から日本への支援は全くないのだろうか気になり、調べてみた。すると、2011年3月11日の東日本大震災後にガーナから支援があったことが分かった。ガーナの野口記念医学療研究所から福島県の野口記念館にガーナチョコが送られ、東北の子どもたちに配られていたということである。その後も、ガーナの高校生が来訪し、日本に大きな勇気を与えてくれたようである。私は、このことを知り、困った人を助けたい、力になりたいという気持ちはガーナも日本も同じであると思った。ただ、今はガーナの方が困っているだけなんだということに気づいた。同じところを見つけて、また少しガーナを近くに感じる事ができた。

● 伊藤樹李

今回の研修で、私が最も楽しみにしていた訪問地の1つに小学校がある。日本と環境は違えど、熱心に学ぶ子どもたちとそれを全力で支える先生…しかし、私のそんな想像とは裏腹に、初日 JICA 事務所で教育担当の専門家からお伺いした話はガーナの教職人気と教員の勤労意欲の低さという衝撃的なものだった。その後、少し複雑な思いで訪問した小学校…そこで出迎えてくれたのは、私のもやもやした気持ちを吹き飛ばす子どもたちの歓声と笑顔だった。現地の先生との意見交換では、笑顔で子どもたちの未来を想う先生方の温かい心を感じる一方で、金銭的に厳しい現場の現状を強く感じた。もし働いてもきちんとお給料が貰えないとなったら、私は今のように一生懸命働くことができるだろうか？とふと疑問に思う。ともすると、ガーナの先生方は日本の先生よりも教育熱心なのかもしれない。ガーナの教育には課題がまだ山積している。しかし、学校には先生と子どもの“笑顔”があふれるという最高の同一性を感じられたことは非常に嬉しく思う。

● 加藤未来

野口記念医学研究所の設備や日本人の JICA ボランティアの多さに、日本の海外支援はこんなにも行き届いていた。そのことに、研究所の人はとても感謝していた。しかし、私を含め、日本人は知らない。日本人として、そのことを知り、誇りをもちたい。今もなお、野口英世がガーナと日本の大きな架け橋になっている。また、日本のチョコレートの約8割がガーナの力カオを使っていることも知り、ガーナと日本がこんなにも密接につながっていることに気がついた。学校という場所は、共通していることが多い。特に、子どもや先生は一緒である。子どもの好奇心や行動、笑顔、素直さなどは本当に一緒に、かわいい。そして、先生の子どもへの「よりよい人、未来になってほしい」という願いは変わらなかった。だから、海外の学校であっても、教師海外研修受講者がすぐ打ち解け、輝ける場所なのだと思う。

● 高井季代子

研修を受ける前は、日本とガーナを繋ぐものとして思いつくのはチョコレートくらいであった。実際に訪れてみると、日本の自動車や自転車がガーナ人の足になっていることが分かった。ガーナにおいて、日本に対する印象そのものはあまり強くないようだが、トヨタ、ホンダ、スズキはよく知られている。しかも、made in Japan の品質は、ガーナにおける日本に対する信頼や高い好感度に寄与している。人と人の直接的な交流がなくても、見えないところで産業が繋がりを作っている。日本の先人が真面目にいい車を作ってきたことが、今現在のガーナと日本の友好関係の礎の一つになっていると言える。車に限らず、JICA の人的交流や技術支援の誠実な取り組みが、いい繋がりを保っている大きな要因であると感じた。文化面で似ていると思ったことは、あいさつやお礼を大切にしていること、サッカーが好きなこと、パンが好きなこと、餅やおにぎり に似た食べ物があることなど、いくつもある。家族の繋が

りは強そうなのに家族で食事をあまり一緒にとらないことは意外で、葬式ポスターと派手な棺は何よりも驚いた。

● 高井菜穂子

ガーナは、JICAによる支援、青年海外協力隊の活動、カカオ豆、医療など、様々な分野で日本と関わりがあるのだということがわかった。特に野口英世の遺志を受け継ぐかたちで設立された野口記念医学研究所では、ガーナの若い研究者たちが、医療への高い志をもって熱心に研究活動を行っていたことが心に残っている。エイズウイルスやエボラ出血熱などの感染症の研究で成果を上げ、西アフリカの医療の中心である野口研。日本からの支援も多く、ガーナの発展とアフリカの人々の健康という共通の願いに向かって、ガーナと日本が手を取り合っていることを知り、うれしく思った。

● 野口哲平

まずは、日本について深く見識を深めておかななくてはならないなと思った。ただ、何となく知っている日本では、繋がりや同一性を理解する上で上辺だけになってしまうからである。JICAの言う国際理解とは、『海外のことを知る』から、『自分の地域のことをよく知る』という考えに変わってきていると言うことを事前に教えてもらっていたので、地域理解を深めた上で参加できたことが良かったと思う。現地に入る前に、書籍やインターネットでガーナについて調べることで、国内においてもつながりや同一性を知ることができたが、それはデータに上がってくる内容のみなので、真の理解という意味では物足りなく思った。その足りないと思った部分を訪問することで補完する形になったと思う。現地では、事前に調べた内容と同じことや全く異なっていることがあった。特に国民性については、実際に来ないと同一性や異なる点に気付けなかった。また、市場にあふれる車・電化製品やODAについて、つながりがとても深くなっていることに気付けたことが良かった。

● 藤井健太郎

「ガーナといえば、チョコレート」がすぐ連想されるほどに、チョコレートはガーナの代名詞になっている。ガーナ政府も重要な輸出品目として、チョコレートの原料となるカカオを管理する。ココボードと呼ばれる機関を中心に、農家からの買付、卸売まで流通を統制する。ちなみに、麻袋一袋(約64kg)あたり100US\$で買い付けているそうだ。安定した農家の収入を確保するとともに、農業技術の指導までも行う。それこそが、ガーナ産カカオの品質が高く評価される理由である。日本の大手商社も現地事務所を構え、ガーナ産カカオの獲得を目指す。輸出する側と輸入する側と立場は異なるが、互いに共通しているのは“高品質のカカオ”である。両者の努力の延長線上に、私たちの消費生活があるのだと実感する。市場経済がグローバル化し、生産や流過程が見えにくい社会となった。しかし、身近なチョコレートをたどっていくと、それぞれの過程で関わる人々の努力が見えてくる。カカオポッドから白い果肉を取り出し、何度も発酵を繰り返すガーナの人々の姿が思い出される。

● 山口貴史

今回の研修では、様々な研修先を見学した。その中で、野口研究所、伊藤忠商事、農園など様々なところで日本とガーナがつながっていると感じた。ガーナという国に多くの日本人が関わっていることは、自分自身はあまり知らなかったが、とても嬉しく感じたことであった。ここで関わっていた人々は、自国の利益を高めようとするだけではなく、互いの国を尊重しながら、互いの国のためになるように活動していた。この結果、自分だけがよいという視点ではなく、すべての人のためになるように考え、工夫して、行動しようとする気持ちを生み出していると感じた。それは、どの国においても大切なことである。特に、これからの未来を背負っていく子どもたちにとっては、尚更であろう。ガーナで関わった子どもたちは、みんな素敵な笑顔で、いきいきと活動していた。これは、どの国のどんな子どもも同様であってほしいことである。笑顔で、いきいきと活動する中で、自分の夢や志をしっかりと持ち、共に生きている人々のことを考えながら行動できるように、大きく成長して行ってほしいと強く感じた。

● 山田真沙美

現地につくと、たくさんの日本車が走っていることに驚いた。日本はよくわからないけど、トヨタは知っているという話に物でのつながりは多くあるように思った。その証拠に、企業の広告を目にすることも多く、自分たちが思っていた以上に多くの一般企業の参入があることに気付いた。これは、企業の参入に限らず、支援に関しても同じことが言える。野口医学研究所では、人々の健康を守りたい、人の役に立ちたいという思いで研究を続け、仕事に対して誇りを感じている現地研究員に会うことができた。そして今、現地の人が研究リーダーとしてプロジェクトを動かしている。これは、現地の人々の思いを大切にしながら日本も人々の健康を守るという同じ立場に立って、継続的な物資支援、技術支援を行った結果、ガーナの研究員の自立支援につながったのだと思う。そして今、同じ願いをもち、共に歩むパートナーとしての関係を築くことにつながったのだと思った。

4. 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」観点から学んだこと



● 青山英孝

教育の大切さを強く感じた。ガーナでは学校や教材が足らず、教員の意識も低く、国策として基礎的な教育の充実が求められていた。人々は一生懸命働いて、頑張っているが、やはり教育は何をおいても大切だ。確かに勉強をしなくても生きていけるかもしれないが、心豊かに生活していく上でのちょっとした知恵や常識は、教育で培っていくものだと思う。先進国でも開発途上国でも、教育がその国の人を創る、そして、人が国を創り上げ、さらに国を豊かにすると感じた。また、負の遺産を正しく伝えていく大切さも実感した。ケープコーストには物扱いされた奴隷を集めて競りをした建物が残されていた。足かせをはめられた群衆が、国外に連れ去られた悲しい歴史や悲痛の思いを伝えるためにこの世界遺産はずっと守り続けていかなければならないと思う。最後に、相手と分かり合えた上での交流や支援は、両国に感謝と尊重の気持ちを育むと感じた。野口記念医学研究所や国道8号線、太陽光プロジェクトのように、日本の視点から支援の在り方を模索せず、その国の文化や風習、経済状況等を考慮した支援を継続すること、そして、相手に寄り添った形式的な支援ではなく、相手国が自立できるように段階的な支援を行う大切さを知った。

● 板倉めぐみ

ガーナで活躍する日本人の方々に出会い、私はとてもビックリした。水道も電気もない村で暮らしたり、ときには頭の上にジャムパンをのせて売り子になったり、想像をはるかに超えるがんばりだった。こんなにもガーナの国の発展のために力を注ぐことができるんだと、日本人の方々の熱い思いに感動をした。日本人の方々は、ガーナ人の文化や思いを尊重し、相手に寄り添い、試行錯誤をしながらも一緒に課題解決に向けて取り組んでみえた。その姿をみて、普段私が保健室で子どもに関わるとき、気をつけていることとよく似ていると感じた。積極的に関わりを持ち、肯定的に受け入れる。相手との信頼関係が築けたときがやっとスタートである。ガーナに行って国際的な協力をするにはできないけれど、学校で困っている子どもに、手を差し伸べることはできる。解決できないこともあるけれど、一緒に悩んで挑戦してみることはできる。日々の生活の中で協力していくことが、国際協力の第一歩であることをガーナでの研修を通して気付くことができた。

● 伊藤樹李

「今、あなたは幸せですか？」そう尋ねると、ガーナ人は幸せだと答える人が多いと言う。実際、研修中に会ったガーナ人は皆、活力にあふれ生き生きとして見えた。かく言う私も今、幸せだ。それは、水道や電気の通った家に住んでいるからではなく大切な家族や友人、同僚がいるからだという理由が1番だと思う。ガーナ人は家族思いと言われる。やはり“人との繋がり”はどんな発展要素よりも幸せの絶対条件になり得ると感じる。しかし、人間は生まれた地域・環境・家庭によってそんな幸せが持続するか否かの差が大きい。病気になってしまった時、インフラや保

健医療、金銭事情などで救える命が救えず、繋がりが絶えてしまう。このリスクは今ガーナの方が高いが、格差問題が進む日本国内でも10年先はわからない。日本では、一番大切であるはずの人との繋がりを自殺という形で自ら絶ってしまう人も多くいる。地域や家庭環境に関わらず、一人ひとりの幸せが何十年、何百年先まで続く未来を、世界中の人が繋がって作っていく必要があると強く感じた。

● 加藤未来

募金をするだけで、本当の支援になるのだろうか、自分は疑問をもつようになった。現地の方やボランティアの方に聞き、自分の目で見ることで、本当に必要な支援は何であるかを知ることができた。本当に必要な支援とは、自分自身で継続的に発展していくことができるようにサポートをすることである。だから、資源が豊富なガーナには、それをいかす技術や制度を、見直しをつけながら、確立していくことができるように教えていけばいいのではないかと思う。ただ、日本が与えているだけではないことを忘れてはいけない。野口記念医学研究者の技術を学んでいたり、カカオなどの資源を輸入したりして、助け合い、高め合っている意識でいたい。また、日本の良いところとガーナの良いところを比較したときに、日本の昔の現状がガーナの今の現状なのではないか考えた。ガーナの良いところはそのままにして、日本の良いところをガーナがこれから盗んでいけたらいいと思う。そして、日本はガーナの良いところを取り戻していきたい。

● 高井季代子

児童労働について話を聞くと、学校に行きたくても行けない子ばかりではないことを知った。ガーナでは教員のモチベーションが低く、指導技術も低く、教科書・教具も不足している現状がある。訪問先の先生達は、熱意のある方たちだったが、中には生徒を放っておいて授業をしない先生もいると聞いて驚いた。「学校に行くより、家で働いていた方がまだいい」という思いが生まれるのも納得だ。児童労働の問題は、メディアによって伝えられると、伝える側の意図が入りすぎたり、シンプルに伝えようとすると大事なポイントを落としてしまったりすることもある。事実を伝えること、知ることは想像以上に簡単ではないことが分かった。それを知ったうえで、批判的な視点を多少もって情報を収集すること、自分に都合のいい情報ばかりを選ばないことを意識したい。支援を考える以前の問題である。日本もガーナも反省すべき歴史を抱えている。奴隷貿易の拠点となったケープコースト城を訪れた際に、ガーナ人も自国の人々の売買の一端を担っていたことを知った。現地の人の中には奴隷貿易の歴史を知らない人もいるそうだ。歴史をねじ曲げることなく後世に伝え、歴史から謙虚に学び、耳を傾け、過ちを繰り返さない努力をしたい。全世界共通の課題である。

● 高井菜穂子

今回の研修で多くの支援の現場を見ることができ、そこ

で支援をする側とされる側の問題意識の差を感じた。支援を受け続けることによる支援慣れが垣間見えるときもあった。他国ありきではなく、ガーナの人たち自身が、自分たちがより豊かに幸せになるために、発展の方法を考えていかななくてはならず、その手助けをするのが支援のあり方だと感じた。そして、その支援は決して一方的な押しつけにならなくてはならず、相手国が本当に必要とすることを、国同士が同じ目的意識をもって進めていくことが大切であると思う。また、発展していくことでその国の良さが大切にされなくなっていくのは、とても悲しいことである（日本もだが）。その国の文化や誇りを失わない発展の方法を探っていくことが大事だと感じた。

● 野口哲平

共通の課題があっても、国民性や国の発展状況・国の物理的な距離から「共に考え・共に超える」ということは容易ではないことが分かった。容易ではないとは言いましたが、ガーナ人を日本人にしまえば容易になるのですが、それでは「共に」ではなくなってしまう。まずは、国民性的な部分をどのように歩み寄っていくのか、お互いにどんなことを望んでいるのかを知らなくてはならないなど思った。また、そのために、どれくらいの労力を覚悟できるのかも確認し合わないといけないと思った。一方的な思いや支援は、結局はうまくいかなくなってしまうということが分かったことが最も価値のある体験だったと思う。お互いがうまくいくためには、教育だけではなく経済や産業や生活の基盤となる社会資本、長い歴史から生み出される国民性を理解し合わなくてはならない。そのための時間や手間は、何度も何度も継続的に行わないといけないと思った。

● 藤井健太郎

野口英世は黄熱病の研究に尽力し、ガーナの地で生涯を閉じることとなった。この業績を引き継ぐ形で設立された野口記念医学研究所は、今日、西アフリカで最高水準の研究機関である。昨年、近隣国でエボラ出血熱が流行した際には、大きな役割を果たしている。この研究所内で使われる多くの実験機器は、JICAの施設設備・機材供与によるものだ。また、ガーナ人の研究者の中には日本の大学へ留学し、学位を取得した者が多い。この留学支援もJICAが担っている。日本からの様々な支援が行われてきたことで、着実に成果をもたらしている。そして、ガーナの人々の手によって研究が進められ、運営されるまでに至った。若い研究者が「ガーナから感染症を減らしたい。」と語っていたが、自国をより良い社会にしていきたいという思いが溢れる。野口英世が種を蒔き、その後の日本人の絶え間ない支援が、若いガーナ人研究者を育てたとってもよいだろう。医療の現場でも地球規模での解決が求められる時代となった。日本とガーナが、協同して研究に取り組む段階へと歩み出している。

● 山口貴史

今回の研修先の中で、「共通の課題について共に考え・

共に越える」という観点において、野口研究所と学校現場での活動が、特に印象に残っている。野口研究所では、日本人とガーナ人の研究者たちがパートナーシップの関係で協力し合って研究を進めていた。日本のもつ技術や必要器材、ガーナのもつ豊富な資源を合わせながら、互いの国のために共に高め合う姿は、素晴らしいものであった。特に、若い研究者達から強い意志を感じることができ、これからの社会がよりよくなっていくことを期待させる出来事であった。学校現場では、青年海外協力隊が現地のもので、現地の人ができる支援を行っていた。この支援は単に与えるものではなく、共に考えて作り上げるものであった。教材がないから教えることが難しいという課題に、現地のもので現地の人ができることを、現地の人々と一緒に考え、共に乗り越えていこうとする姿がとても印象的であった。これによって、多様な視点で物事をみることができるようになり、他の課題に直面した場合でも解決することができる視点を持ちやすくなり、今後のよりよい生活の糧になっていくと感じた。

● 山田真沙美

今回訪問して思ったことは、日本もガーナも互いに補い合う必要のある国であるということである。日本は技術があるけど資源がない。ガーナは資源があるけど技術がない。互いに完全な国ではなく、互いに補い合い、支え合い、共に歩むことでお互いが成長できるパートナーシップ関係を築いていくことがよりよい未来を共に築くことにつながっていくと考えられた。日本が行う技術支援は人に、その国に残る支援であり、その技術によって現地の人々は国を発展させ、持続可能な社会を作り出していくことができる。さらに、ガーナから資源の提供を受けて日本はガーナと共に技術開発を行うことで、自国の産業が発展すると共にその分野において貢献することができる。互いに利益があり、自国のレベルアップにつながる支援で補い合うことが強力なパートナーシップ関係の確立につながり、共に課題を乗り越えていけるのだと思った。